

全国

硫黄島

 いおうとう
 どうみんのかい

会報



巻頭 第3号 2023年発行

発行 全国硫黄島島民の会

編集 島民三世の会

My Roots is Iwoto Islands.

二〇二三年、最新の《硫黄島》をお届けします。



自衛隊の方のご協力で最近見つかった硫黄島での暮らしの遺構〈甘蔗圧搾機跡〉。牛を動力源としてこの機械でサトウキビを絞り、砂糖の原料とした他、絞りカスで鳥酎を作っていたという。令和5年2月27日(月)、三世の会会長 西村撮影。上は実際の作業を写した貴重な写真。



明治学院大学国際平和研究所(=PRIME)、全国硫黄島島民三世の会共催となったシンポジウム。写真は第1部酒井聡平氏(北海道新聞記者)講演より。会場には平日にもかかわらず、メディア関係、遺骨収集関係、島民関係、学生ほか多数の来場者が訪れた。令和4年11月16日(水) 写真：渡邊 英昭

三世の会参加、初の

シンポジウムが開催されました

「シンポジウム」 帰れない遺骨 帰れない島民

—— 硫黄島の歴史・現在・未来を考える ——

全国硫黄島島民三世の会の顧問を務めていた
だいている明治学院大学の石原先生の発案で、
二〇二二年十一月に三世の会が参加する初の
硫黄島に関するシンポジウムが明治学院大学白金
キャンパスで開催されました。硫黄島を取り巻く
問題の中でも非常に重要な、「遺骨収集」について
考える、良い機会となりました。

タイトルは、「帰れない遺骨 帰れない島民

—— 硫黄島の歴史・現在・未来を考える ——。

明治学院大学国際平和研究所に主催いただいた
本シンポジウムは二部構成で、第一部に講演として、

「遺骨収集の戦後史 —— 旧日本帝国と硫黄島を

めぐって」と題して戦没者遺骨研究をされている、

帝京大学教育学部准教授の浜井和史氏、また、硫黄島

遺骨収容に参加された経験を持ち、今年三月から

硫黄島三世の会の北海道支部の代表を務めていた

だいている、北海道新聞記者の酒井聡平氏に登壇

いただき、遺骨収集の課題や、今なお二万人が硫黄島

に眠る理由についてお話いただきました。

そして第二部では、「硫黄島民二世・三世による遺骨収集の取り組み」と題して、毎年硫黄島の遺骨収集に参加している小笠原村在住硫黄島旧島民の会事務局長の精明博氏、三世の会メンバーで初めて遺骨収集に参加した羽切朋子氏が実際の遺骨収集の様子や、初めて遺骨と対面した時の心境についてお話ししました。

三世の会が参加した初めてのシンポジウムとなりましたが、メディアの方々、遺骨収集に関係している方々、学生の皆さんなど様々な方に参加していただきました。

ディスカッションの論点の中で印象的だったのは、硫黄島の事について広く知られていないのはなぜか？という話です。(硫黄島)と聞くと、太平洋戦争の激戦地となった南の島、という事。ディスカッションの中で、メディアはもつと硫黄島について諸問題を発信してはどうか、という意見がありました。(硫黄島)という、毎年の終戦前後の時期の特別番組や硫黄島近海での火山噴火などで報じられていますが、その他、硫黄島のことに触れる機会は殆どありません。学校の授業でも硫黄島について学ぶ機会はほぼありません。そのようなことから、今後、硫黄島について広く発信していく事が重要であるとの話へ帰着しました。大変有り難いことに、

本シンポジウムをはじめ、最近では全国硫黄島島民の会や三世の会について各メディアの皆さんによって取り上げて頂くようになり、少しずつですが硫黄島のことを知ってもらえるようになってきたと感じています。

さらに、本シンポジウムは硫黄島三世に境遇が似ている部分が多い北方領土三世の方も聴講されており、今後の活動においてコラボの可能性についても考えていきたいと思えます。

最後に、このようなシンポジウムを企画・実行いただいた石原先生、PRIMEの皆さま、浜井先生、酒井様をはじめ、お越しいただいた皆さまに御礼申し上げます。

今後とも、よろしくお願い致します。◎

全国硫黄島島民三世の会会長 西村 怜馬



2016年、硫黄島基歩・父島にて

にしむら・りようま

二〇一八年より
全国硫黄島島民三世の会会長

一九八二年生まれ
祖父・菊池一(島民二世)、
祖母・菊池三(島民二世)の孫
東京都出身、在住



第1部にて講演された浜井和史帝大准教授



第2部に参加した三世の会会長と副会長



来場者からは質問・意見が寄せられた

得れない遺骨帰れない島民
硫黄島の歴史を現在と未来を
考える

二〇二二年十一月十六日水曜日
明治学院大学白金キャンパス
本館二〇二教室
第一部 講演

遺骨収集の戦後史
旧日本帝国と硫黄島をめくって
講演① 海外戦没者の戦後
遺骨収集の歴史と課題
浜井和史氏
(帝京大学教育学部 准教授)

講演② 今なお二万人が眠る理由
硫黄島の遺骨収集70年
酒井 聡平氏
(北海道新聞社東京支社記者)

第二部 バネルテラスカッション
硫黄島島民二世三世による遺骨収集の
取り組み
精明博氏
(小笠原村在住硫黄島旧島民の会
事務局長)

羽切朋子氏
(全国硫黄島島民三世の会
副会長)

西村 怜馬氏
(全国硫黄島島民の会事務局長)
全国硫黄島島民三世の会会長
司会 コーディネーター 石原俊
(明治学院大学社会学部教授)

PRIME 所員 全国硫黄島
島民三世の会顧問
主催 明治学院大学
国際平和研究所(PRIME)

全国硫黄島島民三世の会
後援 明治学院大学社会学部付属
研究所 小笠原村在住硫黄島
旧島民の会

※こちらの
QRコードより、
当日の動画を
御覧いただけます。



掲載

朝日新聞夕刊一面にて
取り上げていただきました。

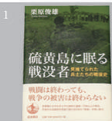
朝日新聞 令和5年(2023年)1月31日(火)夕刊、執筆者 川村直子記者。島民一世：奥山登喜子さんへの聞き取りの様子や三世への取材を記事にさせていただきました。

世界的な新型コロナウイルス感染拡大が収まり、旅行に、故郷への帰省に、と行かれた方も多いことと思います。ところが《硫黄島》は、昭和十九年の強制疎開以降、そこに住んでいた元島民でさえ帰省も、自由な旅行も叶いません。新たな戦争が起き、戦争によって何が起きるのかを考える機会が増えたように感じます。

今回《硫黄島》のこと、元島民の声、私たちの活動などを朝日新聞夕刊にて取り上げていただきました。新聞が出たその日より、全国の読者の皆さまから電話やメールをいただいております。島民三世の会は《硫黄島》でどのような生活が営まれていたのか、今後も伝えてまいります。

【インフォメーション】

- 1 毎日新聞記者・栗原俊雄さんの「硫黄島に眠る戦没者：見捨てられた兵士たちの戦後史」が刊行されました。6月11日には Junk 堂池袋本店にて記念トークイベントが行われました。
- 2 北海道新聞記者・酒井聡平さんのノンフィクション「硫黄島上陸 友軍ハ地下ニ在リ」が7月27日に刊行されます。
- 3 滝口悠生さん（芥川賞作家・三世の会）の小説「水平線」が、2022年度織田作之助賞を受賞しました。
- 4 《硫黄島》より届いた写真。学校の跡地の様子、丸い黄色い物は便器だそう。最近、自衛隊の協力の元、戦前の暮らしの跡がさまざま発見されている。



資料、情報求む！硫黄島に関することでしたら何でも。

ご自宅にございます《硫黄島》に関する文献、写真、映像などのような情報でも構いません。現在、「全国硫黄島島民三世の会」では、歴史を風化させないために、貴重な情報を収集し、デジタル・アーカイブ化も含め、次代へつなぐ活動に取り組んでいます。

会員募集！『全国硫黄島島民三世の会』

祖父母の世代が「硫黄島旧島民」でいらっしゃる孫の世代＝三世の皆様へ。2018年に発足致しました「全国硫黄島島民三世の会」では会員を募集致しております。共に学び、語り合い、いつの日か一緒に硫黄島を訪れたい。事務局（電話 047-458-3615、islandvideo1976@gmail.com）まで。お待ちしております。

今回、シンポジウムにも登壇し《硫黄島》に特別な思いを持つ記者が三度、遺骨収集団としてこの島に上陸し、土を掘る。

文◎酒井聡平
(北海道新聞 岩内支局長・全国硫黄島島民三世の会 北海道支部代表)

なぜ北海道の地方紙記者が、遠く離れた絶海の孤島「硫黄島」に関するシンポジウムで登壇するのか。不思議に思った来場者もいたのではないかと思います。

私は「旧聞記者」を自称し、遺骨収集のボランティアを続けながら、硫黄島と戦禍の歴史の風化に抗う記事の発信を重ねています。取材歴は17年。なぜそんなに「硫黄島報道」に執念を燃やすのか。その理由をお伝えしたいと思います。

第一の理由。それは私が硫黄島関係部隊の兵士の孫だからです。私が生まれる前に亡くなった祖父は大戦末期、硫黄島の隣の父島の部隊にいました。仏壇に入っていた履書や、子供のころに祖母に見せてもらい、その事実を知りました。

それから十数年後、記者になった私はある戦記を読み、玉砕開戦の硫黄島の通信が最期に発したとされる電報を知りました。「父島ノ皆サン サヨウナラ。なんとも悲しい内容でした。私はこんな思いを抱きました。「自分はこの電報が送られた側には兵士の孫だ。今なお硫黄島に残されたままの戦没者は、いわば祖父の仲間たちだ。硫黄島の戦禍の社会的記憶の風化に抗う記者になろう。天國の祖父も喜んでくれるはずだ」


以来、これまでに発信した硫黄島の関連記事は40本を数えます。ここ数年は新聞紙に加え、SNSや講演会、シンポジウムでも取材成果を発信しています。一日一善ならぬ「一日一硫黄島」。とにかく硫黄島に関する何かをつつする。そんな日々を心掛けています。

硫黄島取材に燃える第二の理由。それは私も「遺児」だからです。ただ、戦没者遺児ではありません。10歳の時、父が戦場で倒れて帰らぬ人となりました。別れの挨拶もできぬまま永遠に会えなくなった悲しみは46歳になった今も癒えません。

大戦末期の戦場である硫黄島は、比較的年配の再迎招兵が全国各地から集められた激戦地でした。つまり家族を故郷に残したお父さんたちが絶望の戦いを強いられた戦場でした。だから戦後、残された母子の悲話が多く生まれました。夫を失った妻はわが子を養子に取れないよう懸命に働かなくてはならないため、父だけでなく母からの愛情も十分に受けられず育った遺児も多くいたと思います。戦争が生み出すのは悲劇だけです。硫黄島は、そんな忘れてはならない教訓が刻まれた島です。そうした事実も、戦禍の歴史を伝える取材活動の大きなエネルギー源になっています。

この文章を書いている今、私は硫黄島にいます。今は2023年2月13日午後9時すぎ。宿舎の片隅でこうしてパソコンに向かっています。

4度目の上陸となった今回も、硫黄島と関係の深い父島の兵士の孫として、政府の遺骨収集派遣団への参加が認められました。遺骨捜索は本日で終了。戦没者遺族ら団員と共に9日間、汗にまみれ、土にまみれながら、地を這うように地面を掘りました。収容数は22柱を数えました。78年間、土の中で風化と戦い続けた兵士たち。遺骨が見つかるたびに、私は心の中で「返電、しました。」

「硫黄島ノ皆サン、コンニチハ、父島ノ兵士ノ孫ガ迎エニ来シタヨ。サア一緒ニ本土ニ帰リマシヨウ」

さかい・そうへい

北海道新聞記者

2023年2月まで東京支社勤務。厚労省、東京五輪、宮内庁などを担当
戦禍などの歴史を取材する自称「旧聞記者」として活動する
政府の硫黄島遺骨収集派遣団に19年以降3回参加
取材活動の成果はツイッターでも発信中
「忘れてはいけない」とは決して忘れてはいけない
(父島の時「8月6日」を座右の銘とする46歳)



○新型コロナウイルス、ロシアによるウクライナ侵襲、激動の世界と硫黄島

硫黄島島民三世の会と酒井記者の5年間

硫黄島島民三世の会が発足

- 2月 酒井記者が硫黄島上陸を志して東京支社に着任
6月 小笠原村主催 硫黄島訪島事業にて洋上慰霊祭実施（上陸はできず）

2018
平成30年

- 1月 石原俊教授（三世の会顧問）「硫黄島 国策に翻弄された130年」刊行
5月 小笠原協会主催で石原俊教授の講演会が開催される
6月 小笠原村主催 硫黄島墓参（訪島事業）中止
8月 芥川賞作家で自身も硫黄島三世である滝口悠生さんによる硫黄島をめぐる小説が連載スタート

9月 酒井記者が政府派遣の硫黄島遺骨収集団に初参加する

- 12月 北海道新聞にて「残された戦後 記者が見た硫黄島」連載
不定期 メディア関係者も参加のもと、三世の会で勉強会を開催

2019
令和元年

4月 新型コロナウイルス緊急事態宣言

- 6月 小笠原村主催 硫黄島墓参（訪島事業）中止
7月 北海道新聞ホームページにて特設サイト「令和の硫黄島 残された戦後」開設
8月 酒井記者がTwitterにて硫黄島に関する発信を開始
フォロワーが7,000人超に

2020
令和2年

- 10月 小笠原協会による島民一世への聞き取りを中心とした特集号（第3巻）が発刊される

2021
令和3年

- 9月 全国硫黄島島民の会による「定期総会（島民の集い）」が第50回目を開催
11月 酒井記者、遺骨収集団員として2度目の渡島

2022
令和4年

- 7月 滝口悠生さん（三世の会）の連載をまとめた小説「水平線」刊行
2022年度織田作之助賞を受賞

- 8月 三世の会と青年会議所の連携による「硫黄島VR」計画の同行取材で、酒井記者3度目の渡島

- 9月 三世の会が実施した島民一世への聞き取り（抜粋）が小笠原村発行「村民だより」に掲載される

- 2月 酒井記者、遺骨収集団員として4度目の渡島

- 3月 酒井記者、北海道岩内支局に異動

- 11月 三世の会が初参加するシンポジウム「帰れない遺骨 帰れない島民」が開催
酒井記者も講演する

6月 硫黄列島三島クルーズにて洋上慰霊祭実施

- 7月 小笠原村主催 硫黄島墓参が開催
上陸を伴う墓参は7年ぶり

2023
令和5年

- 7月 酒井記者、初の著書「硫黄島上陸 友軍ハ地下ニ在リ」を出版予定

レポート

三世の会メンバーもはじめて《硫黄島》遺骨収集に参加しました。

文◎羽切朋子
(全国硫黄島島民三世の会副会長)

「やはりこの地は戦地だったのか」

初めて、ご遺骨を手にした時の私の心の声…。私の中で硫黄島の戦前、戦中、戦後が繋がった瞬間でした。2022年夏、硫黄島での遺骨収集に初めて参加してきました。参加したと願ってから20年が経っていました。

祖母の兄たちは強制疎開できず、軍属として硫黄島に残り、そのまま硫黄島のどこかで亡くなったと聞いてました。「祖母の兄たちを探したい！見つけることができるかも！」と、遺骨収集が行われていることを知ったのが、20年前のおがさわら丸での募集中でした。

今まで何度も硫黄島に降り立ってきましたが、硫黄島にてご遺骨に触れる機会はなく、私の中では硫黄島＝故郷であり「お墓のある場所」という感覚で、どこか「本当に、ご遺骨が未だにあるのだろうか？」と墓参に参加するたびに思っていました。

「ありがとうございます。皆さまのおかげで、私たちは今を幸せに生きております」と笑顔で迎える……。遺骨収集の先輩に受けたアドバイスのひとつでしたが、どうしても笑顔になれなかった時がありました。治療後のないきれいな歯が出てきた時の、きつと苦い方であろう歯が出てきた時のことでした。

「どんな思いを、この方も、ご家族も、一緒に戦っていた方々も抱いたんだろう？」「80年一人で放しきらなかったのだろう？」と胸が締め付けられ、笑顔ではなく涙になっていました。

「歯」は、私が祖母の兄たちを見つける手がかりとしていたからだと思います。祖母に「一番上の兄はオシャレで、虫歯でもないのに金を前歯にはめていたんだよ！」と聞いていたからです。出てきた歯は金をはめておらず、祖母の兄たちでは無かったと思うけれど「見つけるんだ！」と強く思っていた私には、祖母の兄たちと思えてしまったのだと今は感じております。

実は私の初の遺骨収集は、このご時世の影響で、たったの4日間しか作業ができませんでした。とても悔しい思いで終わってしまったと思いましたが、終わりでなく、はじまりだと思っています。沢山の、誰かの大切な方々が硫黄島で待っています。祖母の兄たちも見つかりたいですし、感謝も伝えたいからです。

戦地になる前、硫黄島はとても豊かな暮らしで楽しい日々だったと祖母から聞いています。また、数日間硫黄島で過ごす事で実感もしました。そんな硫黄島が戻ってくる事も祈り、何度でも参加していきたいとも思っています。そうそう、内地に住む三世としては初の参加だったようです。

はざりりともこ

2018年より、全国硫黄島島民三世の会副会長。1976年生まれ。祖母・川島フサ子（旧姓・水口 島民一世）の孫。千葉県出身・在住。



晴れた硫黄島にて